

## サンクトペテルブルク国立大学東洋学部日本学科紹介

アレクサンドル B. フィリップフ・荒川好子

サンクトペテルブルクにおける日本に関する教育のはじまりは、1705年に航海数学校内のロシア最初の日本語学級が開かれたことから始まる<sup>1</sup>。その系譜を受け継ぎ、現サンクトペテルブルク国立大学東洋学部日本学科は現在に至っている。

サンクトペテルブルク国立大学東洋学部日本学科を紹介するにあたり、まずはサンクトペテルブルクのみならずモスクワを始めロシア各地の日本学の発展に寄与した偉大な先人をご紹介したい。

ロシアの日本学の始まりは1700年ピョートル1世の東洋言語研究に関する勅令が発令されたことに遡る<sup>2</sup>。それにより、1703年に漂流民デンベイ（1670-1714）がモスクワを経てカムチャッカからペテルブルクに移住させられ、航海数学校内のロシア最初の日本語学級で日本語を教え始めのがロシアにおける日本語教育の始まりとされている。その後、デンベイの助手として1714年にサニマ（?-1734）が二人目の日本教育の教師となり、1736年には科学アカデミー付属校となった日本語学級でソーザ（?-1736）とゴンザ（1718-1739）が日本語を教えるようになった。この二人はペテルブルクに来た1733年当時のアンナ女帝への謁見も果たしている。18歳になったばかりのゴンザは21歳の若さで亡くなるまで、サニマの息子であるアンドレイ・ボグダノフにロシア語の指導をうけ、わずか3年の間に日本語会話入門、露日単語集、簡略日本文法、新スラヴ日本語辞典、友好会話手本集などを編纂している。1746年5人の日本人が日本語学級で教師として働いたが、彼らもまたデンベイやサニマ、ソーザ、ゴンザと同様、遭難しロシア人に救出された日本人であり、ロシア正教の洗礼を受け洗礼名を受け暮らした<sup>3</sup>。ゴンザがなくなった後、日本人の血を引くアンドレイ・ボグダノフと、ピョートル・シエナヌイキン、アンドレイ・フェニョフが日本語学級での授業を続けた。1754年日本語講座はイルクーツクの航海学校に移転し1816年まで日本語教育を続けるが、その後ロシアにおける日本語教育は一時中断してしまう。しかし、後の日本史研究の基礎を成すクストカメラ民俗学博物館東洋研究

---

<sup>1</sup> ヴィクター・ルイービン「サンクト・ペテルブルグ（ロシア）における日本語学習と日本研究の三〇〇年のあゆみ」『日本研究—国際日本文化研究センター紀要』第32集 2006年 P.263

<sup>2</sup> Самойлов Н.А. Основные этапы истории отечественного востоковедения / Введение в востоковедение: Общий курс. СПб.: Каро, 2011. С.530.

<sup>3</sup> デンベイ（ガヴリール）、ゴンザ（デミアン・ポモールツェフ）、ソーザ（コジマー・シュールツ）、シヨエモン（スヴィーニニン）、イヘイ（ヴァシーリ・パノーフ）、キュタロ（チョウールヌイ）、ヒチベイ（レシェートニコフ）、イソジ（レーベヂェフ）。前掲 P.265

室（1818年開設）やアジア博物館（1819年開館）において日本に関する研究はサントペテルブルクにおいて続けられていた。

サントペテルブルク帝国大学（1818年創立）に学部として東洋の言語を学ぶ場が開設されたのは1855年で、日本語の講座が東洋語学部の中国満州モンゴル語科において選択科目として再開したのは1870年であった。日本語講座の再開は、ロシア名をウラジーミル・ヤマトフと名乗っていたアジア局下級官吏通訳官の橋耕斎（1820-1885）の希望が局長に推挙された<sup>4</sup>とも、アジア博物館の「願い書」によるともされている<sup>5</sup>。この橋耕斎は、伊豆半島の戸田村でプチャーチン使節団に接し、1855年の夏ロシアの水夫たちに紛れて日本を密出国した人物である。橋は、1870年から日本へ帰国する1874年までサントペテルブルク帝国大学東洋学部の中国語満州語モンゴル語科の学生に週に2回の講義を行った。和露辞典『和魯通言比考』の業績が認められてゴシケービッチが1858年に当時のロシアで権威のあったデミードフ賞を授与されたが、この辞書編纂には橋が大きく貢献したとされている<sup>6</sup>。

橋の帰国後、在サントペテルブルク日本外交使節団の役人であった西徳次郎（1847-1912）が受け継いだ。西は1874年から2年間東洋学部で日本語を教えたが、帰国後太政官、大書記官、外務大臣や在中国公使も務めた非常に有能な人物であった。1881年から1884年秋までは在サントペテルブルク日本公使館に派遣されていた安藤謙介（1854-1924）が日本語の教師を務めている。この間1883年に帝国大学に約3500冊の日本書籍が寄贈されているが、それは前年の1882年にサントペテルブルクを訪れた有栖川宮殿下が日本語教育のことを知り有栖川宮殿下から贈られたものである<sup>7</sup>。これにより帝国大学は有栖川宮殿下に名誉教授の称号を贈っている。安藤は功績が認められ帰国の際スタニスラヴ勲章を授けられた。安藤は帰国後、富山、千葉、愛媛、長崎、新潟の県知事を歴任、横浜、京都の市長をもつとめるなど、歴代日本語講師を務めた人物同様、非常に有能な人物であった<sup>8</sup>。

その後、1888年、黒野義文（?-1917）が日本語教師となった。彼は「日露通俗会話篇」を作成したほか、書道などの授業も行い、日本研究者育成のために大きく貢献した。歴代の橋がロシア外務省勤務、西と安藤が日本外務省勤務との兼任であったのに対し、黒野は教師としてロシアで30年余り過ごし帰国することなく人生を全うした。

---

<sup>4</sup> 前項 P.265 および Щепкин В. В. Японоведение в Санкт-Петербурге // Современное российское японоведение: оглядываясь на путь длиною в четверть века. С.141

<sup>5</sup> 加藤百合『ロシア史の中の日本学』2008年 P.19

<sup>6</sup> ヴィクター・ルイービン「サント・ペテルブルグ（ロシア）における日本語学習と日本研究の三〇〇年のあゆみ」『日本研究—国際日本文化研究センター紀要』第32集 2006年 P.265

<sup>7</sup> アレクサンドル3世の戴冠式のためだとする説が、戴冠式は前年の1881年3月モスクワで行われたことを理由に間違えであり表敬訪問に過ぎなかったのではないかとルイービンは指摘している。前掲 P.267

<sup>8</sup> 前掲 P.265

1898年、日本語講座は日本語学科として帝国大学東洋学部の独立した学科になり活動を始める。しかし、日本研究発展の実質的なきっかけになったのは1904年の日露戦争で、戦争終結と共に多くの辞書が出版された(1908年ドミトリー・ポズドネエフ(1865-1937)『露日漢字辞典』など)。1907年、ワシリー・コースティレフ(1848-1918)(長崎のロシア領事を経験し、1888年約500頁に及ぶ「日本史概論」、1914年ロシア初の「露日会話辞典」を執筆出版)を日本学科にむかえ、日本語が必須科目となり日本語学科は本格的に活動し始めた<sup>9</sup>。しかし、コースティレフは翌年1908年には退職し、ドーリャ(1876-1931)が後を引き継ぎ日本語文法などのほかに『万葉集』『古今集』『日本書紀』『竹取物語』『土佐日記』『日本外史』など日本文学・日本史の主要古典も教えていた<sup>10</sup>。

日本語学科初めての卒業生を送り出したのは1913年にイワノフが着任した後で、当時の日本語専攻修了要件は日本語、日本文学、日本史のほか、東洋史、中国語、中国史であり、加藤が指摘しているように、現在もこの伝統が受け継がれており、現日本学科のカリキュラムでも中国語は必須科目となっている<sup>11</sup>。

しかし、それから間もなく、ロシアは第一次世界大戦(1914-1918)やロシア十月社会主義革命(1917)など激動の時代を迎えた。1917年の革命後、1920年代から30年代は日本学を指導する高等教育機関が多数新設されたり閉鎖されたりし、日本語学科も東洋語学部も閉鎖され、日本語講座はレニングラード大学文学部で行われるようになった。

しかし、歴史の渦中にありながら、漢文、候文、文語体、古文、平安時代の文学作品から夏目漱石の最新作までが研究され、さらなる研究を進めるため、当時学生またはすでに卒業生であったオット・ローゼンベルグ(1888-1919)、ニコライ・コンラド(1891-1970)、セルゲイ・エリセエフ(1889-1975)、エブゲーニー・ポリワノフ(1891-1938)、ニコライ・ネフスキー(1892-1837)ら、ロシアの日本学に名を残す研究者が日本の仏教、神道、民俗、文法、方言、音声などを学びに日本に派遣されている。彼ら若手研究者たちによりこの1910年代のサンクトペテルブルク(ペトログラード)大学では、黄金時代が築かれた。

ニコライ・ネフスキーは1910年に入学し1914年から大学教員となった。その間、1913年に2ヶ月間、1915年から2年間の予定で日本に留学し、柳田国男、折口信夫、金田一京助らと親交をもち日本語、民俗学、神道、アイヌ語、伝承文学などの研究に従事した。1917年の社会主義革命のとき、2年の予定が過ぎても帰国しなかったために奨学金を打ち切られ、小樽の高等

---

<sup>9</sup> Подробнее см.: Филиппов А.В. Василий Яковлевич КОСТЫЛЕВ (из истории востоковедения и африканистики) // Народы Азии и Африки. 1987, No2. С.53-58.

<sup>10</sup> ヴィクター・ルイービン「サンクト・ペテルブルグ(ロシア)における日本語学習と日本研究の三〇〇年のあゆみ」『日本研究—国際日本文化研究センター紀要』第32集 2006年 P.269

<sup>11</sup> 加藤百合『ロシア史の中の日本学』2008年 P.25

商業学校、その後大阪外国語学校のロシア語教師を務め、1927年まで12年間日本に滞在するも、1937年呼び寄せた日本人の妻イソと共に粛清の犠牲となってしまふ。

セルゲイ・エリセエフはサンクトペテルブルク大学から日本に派遣され東京帝国大学を卒業した。1915年サンクトペテルブルク大学に戻り大学院で日本古典文学の研究を始め、大学院在籍中に教員となった。革命後はフィンランドを経由してフランスに亡命して、ソルボンヌ大学で日本史と美術史を教えた。その後はアメリカに渡りハーバード大学の講義を担当した。

町の名前がサンクトペテルブルクからペトログラード、レニングラードに変わる激動の時代、セルゲイ・エリセエフをはじめ多くの学者が亡命、また30年代のスターリン時代の政治弾圧で、粛清の嵐が日本学研究者にも襲いかかり、ドミトリー・ポズドネエフ（1865-1937）、エブゲーニー・ポリワノフ（1891-1938）、ニコライ・ネフスキー（1892-1937）ら多くの日本学者が犠牲となり<sup>12</sup>、日本学も大きな損害を受けた。

しかし、1917年7月朝鮮日本派遣から戻ったニコライ・コンラドが1922年教授に就任し、エブゲーニー・ジュコフ（1907-1980）らとともに研究と指導に努め、コンラドは1923年『日本：国民と国家』を、ジュコフは1939年『日本史』を出版している。

コンラドは自身も1938年7月29日に逮捕され1941年9月8年まで投獄生活を強いられたが、その後モスクワに移り研究を続け、コンラドは日本研究者の祖、日本学派の生みの親とされている<sup>13</sup>。彼が編纂した和露大辞典2巻（1970年）は電子辞書が主流となった現在も日本語を学ぶ学生たちのバイブルであり、この辞典を手にとったことがない学生はいないであろう。

1940年から1953年までは、ソ連言語学者として有名で言語類型論のペテルブルク学派を主宰したアレクサンドル・ホロドヴィッチ（1906-1977）が日本学科の主任教授をつとめ、1960年代まで一般言語学と日本語を教えた。この時期も第二次世界大戦下のレニングラード封鎖など多くの困難の中で研究指導を続けなければならない非常に厳しい時代であった。

その後、コンラドに教授した学生が活躍し始める。特に、粛清の嵐が吹き荒れた当時の日本学科の教育課程に生気を吹き込んだのは初の女性教授であるエブゲーニヤ・コルパクチ（1902-1952）であったとルーヴィンは指摘している。1936年から教授として迎えられ、彼女も1938年からほぼ丸1年粛清により投獄を経験しているが、釈放後も日本語教育に大きく貢献した。コルパクチより2歳年下でコンラドの妻のナタリア・フェリドマン（1903-1975）も1945年日本学科で教鞭をとり、1939年卒業したエブゲーニヤ・ピヌス（1914-1984）は戦後長

---

<sup>12</sup> См., напр.: Алпатов В. М. Репрессированные японисты // Япония. 1989: Ежегодник. М., 1991. С.310-319.

<sup>13</sup> ヴィクター・ルービン「サンクト・ペテルブルグ（ロシア）における日本語学習と日本研究の三〇〇年のあゆみ」『日本研究—国際日本文化研究センター紀要』第32集 2006年 P.271、加藤百合『ロシア史の中の日本学』2008年 P.52

年にわたり日本語科に勤め、晩年は日本語学科学科長として1980年代まで活躍するなど、戦後は女性教授たちが大いに活躍した。東洋学部内の別の学科である東洋学部極東諸国歴史学科の日本史講座（1944年再開）では1950年からリュボフィ・ゼニナ（1920-）が教鞭をとり現在も現日本学科で熱心に指導育成にあっている。

ウラジスラフ・ゴレグリヤード（1932-2002）は日本学科で1974年に日本仏教に関する講義を60年ぶりに再開した。1975年には日本文学博士号を受け日本語科の教授になり、1982年から2001年まで長きに渡り日本語学科学科長を務めた。その後、ペレストロイカ後の混乱期を含め日本語学科を支えたビクトル・ルイビン（1948-2014）が日本語学科長を務めた。

2008年に新たに東洋学部日本学科が開設され、それまで日本語学科と極東諸国歴史学科の日本語日本文学部門と日本史部門が統合され、「日本学」という位置づけで自らの研究と学生指導を行っている。現在、サンクトペテルブルク国立大学東洋学部日本学科はアレクサンドル・フィリップポフを学科長とし、4年制の学部生と2年制の院生の授業をロシア人教師14人日本人教師2人で担当している。日本語日本文学専攻と日本史専攻の学生が隔年で毎年約20人程度入学するが、実践的日本語の習得には「文法」「発音」「漢字」「会話」「新聞」「文学講読」などの課目に分け2クラス各10人程度で授業を行っている。語学は日本語のほか英語と中国語が必須科目とされ、専攻によって日本語学・日本文学または日本史学の講義があり、さらに学生たちは各々独自の研究課題を決め、指導教官のもとでより専門的な研究に取り組み1年目から毎年学年論文を提出する。

筆者の私感ではあるが、ロシア人は非常に親日的であるように思う。日本の伝統的な格闘技などの日本の精神文化は尊敬の念を持って受け入れられてきたように感じる。また数年前は、アニメや寿司など日本文化の大ブームが起こった。最近ブームは去ってしまったように感じるが、日本語や日本文化は一般に人気があり、以前「日本学」への関心も高い。これからも厳しい時代を乗り越えロシアの日本学を確立してきた偉大な先人たちの系譜を受け継ぎ絶やすことなく歴史を繋いで行きたい。

1. ヴィクター・ルイービン「サンクト・ペテルブルグ（ロシア）における日本語学習と日本研究の三〇〇年のあゆみ」『日本研究—国際日本文化研究センター紀要』第32集 2006年 261-284p.
2. 加藤百合『ロシア史の中の日本学』東洋書店 2008年 P.63
3. Алпатов В. М. Репрессированные японисты // Япония. 1989: Ежегодник. М., 1991. С.310-319.
4. Самойлов Н.А. Основные этапы истории отечественного востоковедения / Введение в востоковедение: Общий курс. СПб.: Каро, 2011. С.528-553.

5. Филиппов А.В. Василий Яковлевич КОСТЫЛЕВ (из истории востоковедения и африканистики) // Народы Азии и Африки. 1987, №2. С.53-58.
6. Щепкин В.В. Японоведение в Санкт-Петербурге // Современное российское японоведение: оглядываясь на путь длиною в четверть века / под редакцией проф. Д.В. Стрельцова. – М., 2015. С.141-144.